

# 大人が気をつけよう！乳幼児の「メディアとのつきあい方」

笠岡市教育委員会 学校教育課

## I 幼児期

別リーフレット「上手なメディアとのつきあい方ができる子どもを育てよう！」に書いたとおり、メディア活用を「禁止」することではなく、「上手なつきあい方を教える」ことで、子どもたちに必要な力を育てていこうとする姿勢が大切です。

ただし、幼児に関しては、小・中学生とは違った配慮も必要となります。



### 3つの留意点

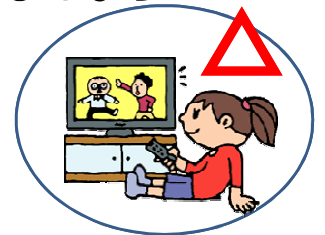
- 「できるだけメディア接触はさせないようにすべきだ」という考え方は偏りすぎです。ただ「子ども任せ」にはしてはいけません。
- 専門家が指摘する「発達段階に合わせたメディア接触の留意点」には注目しましょう。
- 子どもの体験やコミュニケーションを「奪う」ようなメディア接触よりも、それらを「誘発する」ようなメディア接触を大切にしましょう。

### 1 まずはここから！ テレビなどはできるだけいっしょに視聴しましょう

幼児期の子どもは特に、大人や年上の子ども等がしていることに対して強い興味を抱きます。ですから、それを見よう見まねで自分の行動に取り入れるような「観察学習」が、この期の教育には有効であると言われています。

逆にこの特性は、メディア接触の際に気をつけなければならないことでもあります。一般に3歳の頃から、テレビやビデオに登場するキャラクターへの「同一視」や「模倣」が盛んになります。この時期の子どもは、善悪の判断や現実と空想の区別がまだ十分にできないため、良いことも悪いことも同時に学んでしまう恐れがあるのです。例えば、テレビで見た危険な行動をまねしてしまうことなどです。

この問題を回避するためには、テレビなどをできるだけいっしょに視聴することが重要です。内容について問いかけたり説明したりすることで、子どもの理解を助け、正しい現実感を生むことに結びつくからです。「母親が家事で忙しいから、“子守り代わり”にテレビを見せる」ような視聴のさせ方は、極力無くするよう心掛けたいものです。



### 2 保護者が果たすべき4つの役割

#### 1 時間のバランスをコントロールする。

・メディア接触の総時間は自由遊び時間内の半分以下に抑えましょう。

#### 2 視聴する番組やゲームソフトなどの内容は保護者が選択する。

・対話をしながら理解の様子を観察し、ふさわしいかどうかを判断しましょう。

・必要な場面での注意などは、躊躇することなく行いましょう。

・家庭用ゲームソフトには、パッケージなどへ対象（推奨）年齢が書いてあります。また、表現内容がふさわしいかどうかの確認もしましょう。

#### 3 視聴時の子どもの反応や働きかけへ応答する。

・いっしょに視聴し、その時の子どもの気持ちを理解するように心掛けましょう。

・「メディア 対 子ども」の世界を作るのではなく、常に保護者と子どものコミュニケーションをとるように努力しましょう。

#### 4 「観終わったら消す」「約束時間を守る」「ここまでで終了する」などの習慣化を図る。

・メディア接触はON/OFFのメリハリが重要です。利用開始前に約束し、納得させた上で観る・遊ぶようにしましょう。メディア接触に限らず、約束事を守ることの習慣化にもつながります。



## Ⅱ 乳児期

乳児期は、言わば「人生の基礎を築く」期間です。この時期の経験がその後の発達に少なからず影響するという事は、専門家ではない私たちにも容易に想像のつくところです。

そんな乳児期の子どもたちに、大人はどうかかわればよいのか。ここでは「メディア接触」の視点からまとめてみました。



### 1 乳児にとって重要な「応答性のある環境づくり」



乳児期の子どもに必要な発達課題の中でも、「五感を十分に活用しながら周囲を探索し、保護者（養育者）との相互作用を通じて、愛着を築くこと」は大変重要であると言われています。そのために保護者（養育者）は、「子どもが働きかけたときに何らかの変化や応答のある環境（応答性のある環境）」を作らなければなりません。応答性のある環境が築かれれば、自分自身や他者、そして子どもを取り巻く“世界”に対する信頼感を獲得することができるからです。

### 2 テレビやビデオだけで「応答性のある環境」は作れない

子どもが五感を活用して周囲を探索したとき、「鮮やかな色」「動き」「音」で構成され、見る人を引きつける「技法」を凝らして制作されたテレビ番組やビデオは、強い関心を抱かせるものです。しかし、テレビやビデオは「応答性のある環境」にはなり得ません。

問題1：テレビやビデオの情報は、基本的に一方向にしか流れません。乳児期の子どもに特に必要な「応答性」「双方向性」は機能として備えていません。

問題2：テレビやビデオの情報は、結果的に視聴覚中心の限られた刺激・経験となってしまいます。五感を十分に活用する接触にはなりません。

したがって、視聴が長時間に及べば及ぶほど、乳児期の子どもにとって大切な「環境の探索」や「保護者（養育者）との相互作用」の機会が奪われることとなります。

このことから、「少なくとも離乳児期までは、一人で見せっぱなしにするのは良くない」（田島，2007）と、警鐘を鳴らす専門家もいます。

### 3 保護者のメディア利用が大きく影響する

乳児期の子どものメディア接触は、保護者（養育者）がその機会を作らない限り発生しません。実は多くの場合、無意識に作り出されている家庭のメディア環境が、子どもに影響を与えていると言われています。

次のリストも参考にして、ご家庭のメディア環境をチェックしてみてください。もしかしたら、保護者の意図とは異なる影響を受けながら、子どもが日々生活している実態が見えてくるかも知れません。※チェックリストは、幼児や小中学生の家庭も含めた内容となっています。

## Ⅲ 家庭用メディア習慣チェックリスト【参考】

#### 1 1日の中で子どもが自由に遊べる時間のうち、どのくらいをテレビやビデオ視聴に費やしていますか？

- 偏った刺激になっていませんか？
- 他のこと（遊びやコミュニケーションなど）をする時間が減っていませんか？
- 身体を思いっきり動かしてエネルギーを発散する時間・場面が減っていませんか？
- 友達や家族等、人との直接的な関わりを持つ時間・場面が減っていませんか？

#### 2 メディア接触によって「生活習慣」が乱れていませんか？

- テレビを観ることを優先して、夜寝る時刻が遅くなっていませんか？
- そのことによって、起床時刻が遅くなっていませんか？
- 朝食はきちんと食べられますか？ 食欲はありますか？

#### 3 お子さんがテレビやビデオを視聴する時のコミュニケーションは？

- 子どもの働きかけに応答していますか？
- たった一人で長時間見せていませんか？
- いっしょに観ている人（家族等）とのコミュニケーションはとれていますか？

#### 4 保護者のテレビ・ビデオ嗜好度は？

- 保護者のテレビ・ビデオ好きに、子どもをつきあわせていませんか？

